

第3回滋賀県総合教育会議 会議録

1 日時

平成28年8月5日（金）14:00～16:00

2 場所

ピアザ淡海2階207会議室

3 出席者

三日月知事、青木教育長、藤田委員、河上委員、佐藤委員、宇野委員、土井委員

【ゲスト】滋賀県立彦根工業高等学校長 大菅 順市 氏

滋賀県立八日市南高等学校 三上 保彦 氏

岐阜県立岐阜工業高等学校進路指導主事 本田 悟志 氏

【事務局】水上教育次長、岩谷教育次長、浅見管理監、望月教育総務課長、河井企画室長、
辻本教職員課長、樫原高校教育課長、西嶋幼小中教育課長、久保田私学・大学
振興課長、島戸企画調整課主席参事

4 開会

青木教育長

それでは定刻になりましたので、ただいまから第3回の滋賀県総合教育会議を開催いたします。皆様方には何かとお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。本日は「キャリア教育～発達段階に応じた取組～専門高校における教育について」をテーマに議論を進めていきたいと思っております。今回は特に、発達段階に応じたキャリア教育という中で、高校段階の取組を取り上げたいと思います。今日は県内の工業高校と農業高校から校長先生にもお越しいただいておりますし、また県外からは岐阜工業高校の先生にもお越しいただいております。そうした皆様方から、専門高校におけるキャリア教育の取組について、現場の声をお伺いしながら、議論を進めてまいりたいと考えております。よろしくお願いいたします。それでは、開会にあたりまして、知事から一言ごあいさつをいただきます。

三日月知事

皆さん、こんにちは。お暑い中、ご出席をいただきましてありがとうございます。また常日頃、県政の、とりわけ教育分野で様々なご尽力をいただいておりますことに重ねて感謝申し上げます。

今日は2点申し上げます。1点目は、オリンピックがいよいよ始まりました。昨日、高校野球の本県代表である近江高校の激励会を県庁前で開催いたしましたし、空手道全国選手権大会に出場する子どもたちが知事室に来てくれました。また、本日午前中には、全国スポーツ少年団の軟式野球の交流大会が彦根球場を中心に開催されております。

そして、このピアザ淡海に入られたときにお気づきになった方もおられると思いますが、昨日から全国養護教諭の方々の研究大会が天津で開催されておまして、また、昨日から日本看護学会の看護教育の研究大会、これも全国大会ですが滋賀県で開催されております。何が言いたいかといいますと、全国にしろ、世界にしろ、他と交わることによる学びの重要性についてです。他と、いろいろな方々と交わる、もしくは競い合うことにより得られる学びというのは、とりわけ子ど

もたちにとっては、将来の糧となりえるだろうと考えております。ぜひそういう機会を滋賀県の教育分野においても、みなさんと一緒に作っていきたいと考えております。

もう一点は、今月の日本経済新聞の「私の履歴書」で大村智先生の連載があります。昨年、ノーベル生理学医学賞を受賞された先生でございまして、山梨県で育たれました。連載がまだ第5回までですので、今は幼少期、青年期でございしますが、非常に示唆に富む、また教育にもいろいろと通ずるところがある連載をしていただいていると思います。もちろん、ノーベル賞を受賞される方ですから、何となく我々と違うと思いがちなんですけど、そのお言葉一つひとつは、また生活、暮らしの一つひとつは、私たちと同じようなものの考え方や生き方をされているように思います。また親子の関係でありますとか、友だちとの関係、先生との関係、これもまた我々の教育行政に活かせること、資することがあるかと思えます。私は常々、高校生、大学生と会うと、ぜひ研究を進めてくれ、もしかするとノーベル賞をとれるかもしれないぞと申しております。水産試験場に行っても、いろいろな畜産試験場に行っても、ぜひ研究を進めてほしいと伝えています。これはノーベル賞ものになるんじゃないですかということを申し上げると、皆さんはいいややおっしゃいます。どこかで自分で限界を決めて、あきらめてしまっていて、小さくなっていないだろうかということを、お互い自戒自省しながら、世界に通じる人材を一緒に育てていけたらと考えております。

今日は、関係者や先生方にご協力いただいて、専門高校における取組ということで、滋賀県が大事にしてきた、また、ある意味では強みであるこれらの分野について、しっかりと学び、共にやっていきたいと思えます。限られた時間ではありますが、どうぞよろしくお願いいたします。

青木教育長

ありがとうございます。それでは、さっそくですが本日お招きをしておりますゲストをご紹介します。

まず滋賀県立彦根工業高等学校長、大菅順市様です。

大 菅 校 長 よろしくお願ひします。

青 木 教 育 長 次に、滋賀県立八日市南高等学校長、三上保彦様です。

三 上 校 長 よろしくお願ひします。

青 木 教 育 長 本日、お忙しい中お越しいただきました、岐阜県立岐阜工業高等学校進路指導主事の本田悟志様です。

本 田 よろしくお願ひします。

進路指導主事

青 木 教 育 長 それでは、本日の会議ですが、はじめに県内の工業高校と農業高校の取組を発表いただきまして、意見交換を行いたいと思っております。その後、本田先生から工業高校の取組を発表していただき、本県の専門高校のあり方についての意見交換を行っていきたいと考えております。それでは各校の発表の前に、まず本県におけます発達段階に応じた系統的なキャリア教育の取組について、事務局より説明をお願いします。

高校教育課長 滋賀県におけるキャリア教育と職業教育の取組みについて説明いたします。一般に「キャリア教育」と「職業教育」という言葉については、同じような使われ方をすることもあります。が、厳密には異なる意味合いがございます。「キャリア教育」と言った場合には、広い意味で「一人ひとりの社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てる」ことであり、例えば人間関係を形成する力や自己理解・自己管理をする能力、課題に対応する能力、そしてキャリアプランニング、すなわち自分の将来を設計していく能力などを育てることを指します。また、「職業教育」と言った場合には、「職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる」ことで、具体の職業に関する教育を指します。

では、お配りした資料1『県立高等学校における「滋賀を支える職業人」の育成』を御覧ください。この資料は、「地域の子どもを地域で育てる」という基本的な考え方のもとに、就学前から高等学校まで、発達段階に応じて系統的にキャリア教育を進めている様子を図式化したものであります。まず就学前は、高齢者や働く方など、触れ合いや交流を通して人と関わる力を育成し、小学校では職場訪問や体験活動、集団活動を通して社会性や自主性を育成します。中学校では滋賀県の特徴的な取り組みである「チャレンジウィーク」によって、県内の全ての中学生が5日間の職場体験をすることで将来を考える力や勤労観を育む取り組みを進めています。このような系統的なキャリア教育の取り組みに続いて、高等学校におけるキャリア教育や専門高校等における職業教育を進めます。起業家精神の醸成、社会人基礎力の育成や、高度な専門技能の習得を図ることで、地域の第一線で活躍できる人材を育てていきたいと考えております。現在、図の左側にありますように、高校卒業者の就職者で県内で就職した者の割合は90%を超えており、喜ばしい状況だと考えておりますが、学科で学んだ技術や技能を生かすことのできる職種への就職が促進されるよう、さらに取り組みを深化させていく必要があると考えております。

具体的には、高校教育課では本年度2つの事業を展開しています。図の右側にあるキャリア形成支援事業と専門高校プロフェッショナル人材育成事業です。丸印のところが、事業における取り組みの柱を明示しております。また、その下にそれぞれの取り組みの具体例を示しております。「県立学校キャリア形成支援事業」では、生徒のキャリア形成を支援する効果的なカリキュラムの確立を図ったり、就業体験の効果的な活用を図ったりすることで、生徒の社会的・職業的自立を目指すキャリア教育の推進をしております。本事業では、普通科高校4校、専門高校3校、総合学科高校1校の計8校を指定しております。「専門高校プロフェッショナル人材育成事業」では、社会の変化や産業の動向等に対応できる、高度な知識・技能を身に付け、各専門分野での第一線で活躍できる地域人材の育成を目指しております。大学や研究機関、地域産業の知や技術を活用した研究開発を推進したり、高度な

資格取得を進める取組みを行っています。本事業では、農業高校3校、工業高校3校、商業高校2校の計8校を指定し取組みを進めております。具体的な取組みについて、少し紹介しますと、長浜農業高校は、全国農業高校お米甲子園で3年連続金賞を受賞しており、平成26年度には、最高金賞を受賞しております。八幡商業高校は、近江商人の特徴のひとつである産物廻しで行商販売を行う「近江商人再生プロジェクト」を実施しています。また、今年度の全国高等学校簿記コンクールにおいて団体で全国3位になっております。大津商業高等学校では、ネット販売の楽天市場で商品販売を行っています。また、昨年度の商業高校フードグランプリにおいて、鮎ずしの飯を使った商品を開発し、準優勝にあたる審査員特別賞を受賞しております。また、工業高校の3校は、龍谷大学の理工学部と連携し、生徒が大学の講義を聴いたりするなど専門教育の深化を図る取組みをしています。本日は、この両方の事業で指定校となっております、八日市南高等学校と彦根工業高等学校より、後ほど取組みについて説明をしていただきます。

滋賀県教育委員会としましては、滋賀を支える職業人育成に向け、専門高校での教育を充実させていきたいと考えております。

青木 教育長

ありがとうございます。それでは、引き続きまして、各校の取組状況や課題についてお話をいただきたいと思います。

まず、彦根工業高等学校の大菅先生から発表していただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

大菅 校長

彦根工業高校の大菅でございます。どうぞよろしくお願いいたします。今日は、このような機会をいただきまして、ありがとうございます。ではさっそく発表の方をさせていただきます。まず、本校の概要からご説明を申し上げます。校訓「剛健和協」のもと、大正9年に彦根工業学校色染科、紡織科の2学科で開校いたしまして、校名の変遷を経て、また小学科の改廃は全日制13学科、定時制3学科を経て、2万2千余名の卒業生を輩出する学校であります。先ほど、知事のお話

にありましたが、今年オリンピックがあり、次のオリンピックの時には本校は100周年を迎えるという、めでたい年になる予定です。続きまして、教育目標ですが、ものづくりを通して社会に貢献する資質と能力を養うというのが大目標でございまして、キーワードは、「技術人」「社会人」そして「国際人」というふうにしております。私が本校に赴任して3年目ですが、赴任した当初からモットーとして生徒に言っているのは、「3つのC」こう言っています。こういう不確実な時代ですから、強い意志で**Challenge**。そして、根気よくコツコツ、それを続ける、**Continue** して、そして、私を変えましょうという**Change**。主語は、一人称の私なんです。私の強い意志で私を変える。これが私の学風にしておるところでございます。入学者定員、学校規模はここに示しましたように、機械科が3クラス、電気科2クラス、そして建設科1クラス、計6クラスの全日制。これで3学年それぞれあります。また、定時制につきましては機械科1クラスということになっております。右にございますこの写真は、実は機械科の生徒がトラクターを改造しまして、ロードトレインというのをつくりました。その写真です。教育課程ですが、上の段から各学年の普通教科、黄色が普通教科、そして右が専門科目になっておりますが、3年間をまとめますと、一番下の段にありますように、90単位のうち、黄色の普通教科が6割で、ピンクの専門科目が4割を学ぶことになります。従いまして、普通教科の学習については、若干薄まっていくということになります。本校の学習指導の特徴でございますが、実務実技系の実習、製図につきましては少人数授業を実施しております。また、実習、製図につきましては、実技ですので、仮に休んだとしたら、それは必ずまた補習、夏休みなり放課後なりに受けて、技能を習得させる、こういうふうな体制をとっております。下の4段にありますように、青で示しておりますが、資格試験ですとか補習ですとか、そういったものを放課後、あるいは夏休みに行っております。また3年生については、進学補習を夏休み行っております。つづきまして、授業につきましては、先ほど高校教育課長の方からございましたが、キャリア形成支援事業はインターンシップを中心として行っておりますし、プロフェッ

ショナル人材育成事業におきましては、高度技能の資格取得を目標として実施しております。その下にございますのは、厚生労働省の事業でございまして、こちらの方からもご支援をいただいて、生徒ならびに職員の技能向上に活かしておるところでございます。一番下のところになりますが、地域との交流ということで、防災かまどベンチの普及に取り組んでおるところでございます。だいたい10年くらい経ってきましたので、40か所、地域の公園ですとか小学校あるいは老人福祉施設ですとか、そういったところに40か所くらい60基の防災かまどベンチを設置してきました。あるいは、小学校への出前授業。親子ものづくり体験教室、里山保全事業を行っておりますが、右にある写真は荒神山という山でして、地元の方と山の頂上付近に生徒があずまやを建てまして、休憩所を作ったと、こういう写真でございます。

いよいよ本題のキャリア教育に入っていきますけれども、別紙の後ろの方につけてあると思いますが、キャリア教育プログラムというのがございます。目指す生徒像、そして伸ばしたい5つの能力を設定しまして、それらに向けて各学年におけるプログラムを設定しております。続けて、また別紙のキャリアロードマップという用紙がお手元にあるかと思いますが、進学、就職それぞれ網掛けをつけて示しております。前のスクリーンの方を見ていただくと、龍谷大学との連携につきましましては水色で、インターンシップにつきましましては赤色で示しております。このような形で1年生から各学期系統的に3年間やっております。龍谷大学との連携につきましましては、1年の7月から実施しております。そして、インターンシップにつきましましては、1年生の3月から始めまして、校内だけでなく、企業の方に講師をお願いするなどして、深く学習を進め、いよいよ2年生の1学期7月、実は今年度は、つい先日終わったところですが、7月7日に始めまして、2日から5日間の就業体験、インターンシップを本校2年生の生徒218名全員を対象としておりますけれども、218名が、131社へ行って、インターンシップを行ってきました。3年生になってきますと、いよいよ進学なり、就職なりへの活動が盛んになってきますので、量がだいぶ増えてきております。そのようなところで、すすめて、3年生の、実

は先ほど申し上げました普通教科の学習が薄くなりますので、龍谷大学との連携の中で、数学について、大学の理工系では大変そういった勉強が厳しいので、スクーリングをしていただいています。これは本校だけでなく、八幡工業、瀬田工業高校も同様にいただいています、3年生の2月まで続けてやることになっております。こういった結果、卒業生の進路状況はと申し上げますと、このような円グラフで表されるように、進学が約4分の1、就職が4分の3ということになっております。つづきまして、就職に関して、お話を進めさせていただきます。求人数は年々、リーマンショックの後の影響を忘れるような数字になってきました。昨年度でだいたい、リーマンショック以前の数字に戻って来まして、今年は、それを上回る求人を頂戴しております。求人倍率は今年はたぶん6倍を楽に超えると思っております。つづきまして、卒業生の就業地域ですが、右の表にありますように、滋賀県内に98%が就職します。生徒の通勤時間は30分以内、私たちの時代だったらとても考えられませんでした、そのような状況です。左にございますのが、関係業種です。一番上と2段目の建設・製造業に関連のところに、82%が就職をしております。右にございます写真、これは本校の建設科の生徒が、公園に行って、地元の方と一緒に防災かまどベンチを作っているところでございます。就職後の離職率を本校では追跡調査しておりまして、左の表にございますように全国工業校長協会も追跡調査をしています。全国の高校というのは、厚生労働省の発表データです。これは3年以内の離職者の調査です。右にございますのが本校のデータですが、私どもでは1年以内の離職率調査でございまして、基準を一緒にするために厚生労働省のデータと並べてみました。実は平成25年に本校の場合は極端に数字が上がっているのですが、この年は実はちょっと訳がございまして、このような数字になっております。これを例外と考えていただきますと、だいたい離職率としてはそんなに高くない、全国の高校から見ても高くない。逆に近畿全体よりもまだ近畿の工業高校よりもまだ低くて、1桁というのはそうそうないという、このことはちょっと自負しておるところでございまして。その追跡調査と同時に卒業生に対して、充実度調査をし

ておりますが、平成 25 年は先ほど申しましたように離職率が高かったのですが、直近で言いますと、このような状況で、会社に勤めて充実しているという生徒が多いというのも本校の良いところだと思っております。

続きまして、プロフェッショナル人材育成の事業の一つであります、資格検定、これは特別高度な資格ではございませんが、一般的な資格ですが、実は私も赴任しまして、いろいろと調べてみましたら、平成 10 年に比べますとずいぶん下がっておりまして、これはちょっと目を覆うような状況でしたので、これはプロフェッショナル人材育成事業でもっとテコ入れをしなければいけないなというふうなことを思っております。右側の写真はこれは全国高校生ものづくりコンテストで、木工部門の競技大会の様子を撮ったところでございます。

いよいよ最後、まとめをさせていただきますが、本校が目指す工業教育、さまざまあるのですが、下半分にありますように、工業高校生のブランド化、特に彦工ブランドというのをきちっと作りたい。彦工の生徒だったらいいよという企業様の評価をいただけるようにしたい。そのために、ものづくりの精神、魂をきちっと生徒に植え付けて、培っていききたいなというふうに思っております。そうすることで、逆に優位性を保てる。あるいは彦工ブランドが定着していく。中学生の保護者の方が聴いていただいても、あそこなら、というふうに安心していただけるような彦工ブランドを作っていきたいなと、こういうふうな学校にしていきたいなという思いを持っております。様々な課題は山積しておりますが、ここは時間の関係もありますので、一番の私が今、取り組んでおりますところは、生徒の技能もさることながら、それを指導するのはやはり教師ですから、指導者の養成。後ほど時間がございましたら、オープンファクトリーという、私が新しく作った造語ですが、こういった思想のもとに、教員の指導者養成をしておりますという話ができればと思います。そこに今、一番力を入れております。私が彦根工業へ赴任させていただいて 3 年経ちましたけれども、本当に課題山積ですが、そして日々忙しく、大変だなと思っておりますけれど、ただ、やっていて教師として校長として、楽しく充実した日々

を送らせていただいております。以上で私の発表とさせていただきます。ありがとうございました。

青木教育長

ありがとうございました。ただ今、大菅先生からご説明いただいたことに対するご質問等につきましては、後ほど時間を設けておりますので、その時にお願いしたいと思います。

それでは次に、農業高校における取組につきまして、八日市南高等学校の三上校長先生から、よろしくお願いいたします。

三上校長

八日市南の三上です。よろしくお願いいたします。このような機会をいただき、ありがとうございます。私は4月に本校に赴任いたしまして、4か月になるんですけれども、日々、農業で教育をすることの素晴らしさを実感しています。今回、その素晴らしさを少しでもお伝えできればと思っております。資料は紙ベースで説明させていただきたいと思いますので、八日市南高等学校の取組ということでご覧ください。与えられた時間が10分間ということで、飛ばすところは飛ばしながら、本校の取組を中心に話させていただきますので、よろしくお願いいたします。

1 ページ目ですけれども、沿革が書いています。設置学科が全日制農業学科、農業科と食品科と花緑デザイン科、1クラスずつの3クラスです。農業科は、野菜を作ったり、ブドウを作ったり、それから乳牛それから豚、そういうのを作っております。それから食品科は、それに基づいて、食品を製造して、販売をするということをしております。花緑デザイン科は、造園をやっております。2 ページの上の生徒の在籍状況ですけれども、合計の男女を見ていただきますと、近年、女子が非常に多くなっております。1年生、2年生が45人、75人。3年生は63人、内訳でみると47人で男子が多いんですけれども、1、2年は女子が多い。全国的な傾向だということです。教育目標ですが、職業教育を通して社会で活躍できる良識ある人材の育成。そして、地域に貢献するということを大きなテーマとしています。地域に貢献をして、住民の方から「ありがとう」と言ってもらえると、生徒が達成

感というか、自尊感情を育んで、また、次の取組に向かうと、そういう好循環が生まれることを目標としております。進路の状況をご覧ください。2ページの下グラフが見やすいですけれども、だいたい就職が6、進学が4というふうになっております。3ページに具体的な27年度の進路決定状況を挙げております。関連大学、関連産業へも就職をしております。5番目の離職率についてですけれども、本校の卒業生の就職3年後の離職率というのは、約20%です。これは県平均、滋賀県の労働局から資料をとりまして、34.9%という数字があったんですけれども、それに比べるとかなり低いのかなというふうに思っております。それで、その原因は私なりに分析をして、本校のキャリア教育で、職業観、勤労観をしっかりと育成できているのかなというのが一つ。もう一つは、農業科の実習というのが、暑い時には暑いところで作業をします。今日もビニールハウスの中で、汗を流しながら作業をしていました。寒い時には寒いところで作業をします。環境に順応する力というのが自然についていくのかなというふうに分析をしております。次、4ページに行きます。本校のキャリア教育ですけれども、（1）のキャリア形成支援事業3か年、それから専門高校プロフェッショナル人材育成事業2か年、その指定を受けて、計画的にやっております。5ページにキャリア教育の本年度の予定が載っております。本校の特徴的なのは、インターンシップが非常に多いことです。5ページの表で、4月20日から、2行目、3行目。それから真ん中の、7月4日から7月10日までのインターンシップ。これは3年生が対象です。合計22名ほどです。それから真ん中の9月26日から9月30日。これは2年生119名全員、農業は農業関連、食品は食品関連、花緑デザイン科は造園関連産業に行っております。それから、次に6ページ。プロフェッショナル人材育成事業ですが、農業大学校へ行って学んだり、それから各部門のプロからの指導を受けたり、青年農業者からの話を直接聞いたり、それから10月には、滋賀県立大学の教授の講義をお聴きしたりして、専門的な技術の習得に取り組んでおります。各種資格にもたくさん、ここには数字を挙げていませんけれども、たくさんチャレンジをして、たくさん合格しております。最後に2月10日に

八南成果発表会という形で、発表の機会を設けております。後ろの方に別紙資料1、別紙資料2というキャリア教育の全体像をA3判でつけさせていただきましたので、後ほどご覧ください。5番目の特徴ある取組、たくさんやっております、しゃべり出すと30分、1時間かかってしまいますので、抜粋しながら説明いたします。まずは八南レストランプロジェクト。これは生徒がレストランを経営、開設をして地元の人たちを招くものです。第1回は2010年にやらせていただいたと聞いております。それから2番目がムラサキプロジェクト。これは東近江市の花である紫草を、これも地域のみなさんや県外からもムラサキを育てる会の方に来ていただいて、一緒にムラサキの絶滅を防ぐために、栽培をしたりしています。最近、活発なのが、3番と4番です。まず政所茶プロジェクトです。政所茶は奥永源寺の政所地区で室町時代から栽培されている非常に高級なお茶で、在来種でコクやうまみが他のお茶よりも深い。ところが近年、過疎化、高齢化で、担い手不足になった。これに目をつけまして、昨年、耕作放棄地の茶畑を借り受けて、「八南茶園」と名付けて、そこへ行って栽培をしております。この春、一番茶をやっと摘みました。50キロ摘みましたが、全部手摘みです。生徒も手摘みです。50キロ中、500グラムは私が摘みました。ヤマビルに噛まれました。血も提供しました。それで製品化をして、販売をしました。このような形でデザインをして販売をしました。非常に好評でした。その時に、ぜひ政所茶をもっと宣伝してくださいと地元の方がおっしゃいました。分かりましたと答えてきましたが、この政所茶を後ほど味わっていただこうと思っております。それから4番の暮らしのデザインプロジェクト。これは花緑デザイン科が様々な地域貢献をしております。写真は、本校に生えておりました桜をもとにペンダントをつくっているところです。生徒が小学生に教えるわけです。直接、生徒が教えます。本校は生徒をどんどん前に出させて、生徒に様々なことをやらせております。サツマイモの定植を生徒が幼稚園、小学校の児童に教えたり、そういう形でどんどんやっています。教えることは、知識の定着の為にも一番いいです。ラーニングピラミッドの一番下の、教えるのが一番定着するという理論で

す。それから、今年、特にあるのが、様々な方面から、庭造りの依頼が舞い込んでいます。五個荘町の歩道整備を頼めないかと市から依頼をいただいたり、それから政所の道の駅の花壇を設計してくれという依頼をいただきました。この夏も政所に頻繁に行っています。それから、ある学校の PTA から依頼があって、学校の中庭を設計してくれと。中庭の設計をします。施工はしません。設計は生徒がします。地元の公園の庭を設計したり、どんどん依頼が舞い込んでまいります。

三日月知事

素晴らしいですね。県庁もやってもらいましょうか。

三上校長

やらせていただきます。それは、生徒にとってもありがたい話で、庭をつくると 30 年、40 年もつんですね。自分が親になった時に、これは自分が作ったんだと自慢できる。すごい達成感を得られるので、生徒にとっても非常に大きいものを得ていると感じております。それから東北ボランティアにつきましては、今年 5 年目を迎えます。今年も 7 月 31 日から 8 月 2 日まで生徒 22 人が東北まで行って、ボランティアをしてきました。命の大切さとか絆の大切さを認識できます。東北の高校とも交流をしております。最初の年、2012 年にボランティアで遠野市の畑を除草したときに、かぼちゃに出会いました。これです。「いいたて雪っ娘かぼちゃ」と言います。白いです。白くて甘みがあるというかぼちゃです。実はこれは飯舘村の人が開発したんです。震災の 4 日後に品種登録をしたと。だから飯舘村では実際には栽培をしていない。それを種を絶やさないように遠野市で栽培していた。その畑を我々が草刈りに行ったんです。それを聞いて、ぜひとも滋賀県でも栽培を手伝わせてくださいということで、八日市南高校でこれをたくさん栽培しております。飯舘村でふたたび栽培を開始できるまで続けようという取組を生徒会中心にしております。甘いので、あとからちょっどご賞味いただければと思います。いろいろな取組をやっていて、これでもほんの一部でして、しゃべり始めるとたくさんありますので、このくらいにさせていただきたいと思いますけれども、周りの団地に花を一緒に植えたり、いろいろな取組をしています。「あ

りがとう」と言われることが生徒にとって一番達成感というか自己肯定感が高まって、好循環になっているというのが現状です。6番、9ページ、本校の評価につきまして、いろいろな評価を挙げましたけれども、よい評価をいただいております。地域からの評価、これは私が校長室にいますと、たくさん聞こえてきまして、八日市南高校はとても地域に貢献しているとかですね、廊下で出会う生徒が年相応の落ち着きがあるとかですね、中学校からの関係者からは、安心して生徒を送れる学校ですねとかいうふうに、よい評価をたくさんいただいております。10ページの上にかかせていただきましたように、生徒による地域貢献活動や生徒の自尊感情を醸成する指導が定着してきまして、生徒が自信と本校への誇りを持てるようになってきたというのが、こういう評価になっていくのかなというふうに思いますので、こういう流れを一層進めていきたいなというふうに思っております。

7番、今後の課題ですが、いろいろ挙げさせていただきました。私が今一番取り組んでおりますのは、授業改善です。生徒の関心も変わってきて、今、授業をしっかりとしなければいけません。アクティブ型授業への転換。生徒が参加する形へしていきたい。それから、戻りまして6ページになるのですが、キャリア教育職員研修を今年の6月に行いました。これは西日本短大の先生が「可視化ポートフォリオ」というのを提唱されまして、生徒が授業の中身をICTを使ってどんどん記録していった、どんな授業を習ったかずっとポートフォリオをして、そして最後にまとめて、冊子にするというものです。とても効果があると言われまして、それも考えていきたいなというふうに思っております。ただICT機器がありませんので、ICT機器をどうするのかという課題がまずあります。それから、施設の老朽化ですね。技術の伝承とか、関連産業への進路開拓とか、そういうことをこれからどんどん進めていかなければと思います。

最後に農業学科というのは、本当に日々、生き物を教材としている唯一の学科だと思います。生き物を教材にしているのは、農業高校しかないのかなと思っています。命の教育とか、自然に対する畏敬の念などを自然に学べるのが農業高校だと思ひまして、農業教育を発展さ

せていく義務があるなというふうに実感をしております。長くなりましたが、以上で発表を終わります。

青木教育長 ありがとうございます。今、三上先生からご発表いただきましたが、本日は、その中で話題になりました政所茶といたて雪っ娘かぼちゃの試飲と試食をしていただくということでご用意をさせていただきました。

三日月知事 透明感があって、皮まで食べられるしおいしいですね。プリンやスープにしてもおいしいかもしれませんね。

三上校長 今日お持ちするにあたってどういうふうに料理するか学校でも考えたんですが、わざと何も味付けをせずに薄く切り蒸してお持ちしました。地元では「雪っ娘まんじゅう」という商品を開発しています。

三日月知事 政所茶は独特の苦みというか、風味がありますね。

青木教育長 はい、ありがとうございます。

それでは、両校からお話をいただいた内容、本県の教育の話、何でも結構でございますので、ご意見やご質問等があればお願いします。

藤田委員 お茶とかぼちゃ大変おいしかったです。ありがとうございます。

どちらの学校もより実践に近い教育をされており、それに伴う収益が上がってきますよね。その収益で行う学校事業というのはありますか。学校の備品などを買うようなことはできないのですか。

三上校長 収益は全て県に入ります。学校で直接使うことはできません。

三日月知事 収益はどれぐらいですか。

三上校長 年間で 2,000 万円弱ほどだったと思います。

三日月知事

それは聞いたことがありませんでした。

藤田委員

これだけ実践的な教育をされていて、収益も上がっているのであれば、学校の備品の整備が進んでいるのかなと思っていたのですが違うんですね。やはり、学んだことを実際に実践して、それが成果として見えることは、教育が生きてくるという感じがします。その辺の学生さんのレスポンスや反応が生きてるような気がします。先生もそう思っておられますか。

三上校長

そう思っています。実際にモノづくりをして、自分の作ったものが売れると、生徒はイキイキとしている。生徒の教育や生きる力につながっていると日々実感しております。

河上委員

高校生レストランも生徒さんの発想から生まれてきたとお聞きしたんですが、食品を作ったり、カボチャを加工したりとかは、生徒さんによる発案なのでしょうか。

三上校長

最初がどうだったかは分かりませんが、教師はできるだけ我慢して我慢して、出来るだけ生徒に考えさせるように心がけています。我慢しきれず言ってしまうこともあります。

河上委員

以前の総合教育会議で、市川農場さんが、地域の余っているたまねぎをドレッシングにされているというお話を聞いたんですけれども、今、八日市南高校での取組が形になり収益になると、達成感を感じられたり、起業家精神にもつながると思うんですね。知事がはじめての挨拶でおっしゃった他と交わる学びというのが日々の生活の中でずっと実践されていると思います。地域の方に野菜や花の苗を売ったりするなど、地域の人と関わることによって、自らも成長していったという感じを受けました。

三 上 校 長 ありがとうございます。本当に言われるとおりで、人と関わることによって生徒が成長している姿がありますので、ありがたい話だと思っております。

佐 藤 委 員 お話を聞いていたら、お人柄や熱意や想いが伝わって参りまして、私も先生の学校に通っていたらもうちょっと人生が変わっていたのかと思います。まず、彦根工業さんでは離職率も非常に低くて、就職した後の充実調査でも数字が高いということだったんですけれども、具体的に何が充実しているかをお聞かせいただければ、弊社も参考になるかと思いますので。あと、課題が山積されているとおっしゃっていましたが、一番の課題は何だとお考えですか。

大 菅 校 長 一番充実しているのは、生徒がどういう仕事がしたいか、自分にどういう適性があるかを、在学中に担任や進路指導担当が把握していること。教員がきちんと会社訪問をして、ここの会社は楽そうに見えるけど、実はこういう大変さがあるんだとかいうような事を把握して生徒に話をしており、マッチングがうまく出来ているんだろうと思います。自分が学んできたことや高校での学習成果をそのまま活かせるということを基本にして企業とのマッチングを見ていきますから、そういう意味での充実感、予想していたことをきちんと自分で出来ていること、その中で自分が成長できるという意識があるんだろうなあと考えております。

三 日 月 知 事 学校として、卒業後のフォローはしておられるのですか。

大 菅 校 長 先ほどインターンシップの話をしましたが、教員がインターンシップ先の企業を、事前・当日・事後と最低3回は打ち合わせに行くんです。その時に、もちろん次年度の求人をお願いしますという話もありますが、それと同時に、過去の卒業生のデータを持って行って、あの子どもどうしていますと、そういうこともやっています。人事の方から、今こういう風にやっています。こういうことに悩んでいますと聞いた

りもしています。そういうことも出来ているのがいいのではないのかと思っています。企業との連携がうまくいっているんだろうと思っています。あと、課題山積ということで、これについてはグラフをお見せすると一番いいんですが、教員の年齢分布を調べますと、55才以上が32%、50才から54才までが22%、合わせますと55%になるんです。10年たったら、今の教員の45%しか残らない。私たちの仕事のうち、特に専門技能は、勉強したから、知識がついたから出来るかというと、絶対出来ない。生徒に旋盤技能士1級を教えようとしたら、自分で学ぶだけなら2、3年あったら出来ますけど、教え方を含めますと5年、10年かかります。先ほどオープンファクトリーという観点を言いましたが、学校の実習工場ですから、自分とこだけで閉鎖的にやっていると、教員がなかなか伸びない。だから、民間の方に一緒にやりましょうとお願いして、そこへ生徒も巻き込み、厚生労働省関係の事業で、職能協会から派遣していただけるマイスターの方に、高いレベルの技術を、生徒も教員も教えてもらえます。物も企業から持ってきていただけます。さらに、教員が企業の方と交流しますから、今、社会はこうなっているんだということを教員も勉強できて、一石五鳥くらいのことができるのです。今のところ、旋盤技能士2級、次は1級といくのに大体10回、2か月で10回位の練習会を目標にやっております。併せて、厚生労働省管轄の職業能力開発短期大学校、ポリテクカレッジと言われるところをお願いしています。本校の教職員の能力だけを伸ばしてもだめですので、県全体の能力アップのために他の工業高校の先生皆さんに技能の研修に行っていただくということで、去年から県内の工業部会で取組をしました。去年は29名、今年8月9、10日に22名、そこへ行っていただきます。高大連携の関係で、機械・電機・建築関係の技能講習を無償でお願いしております。ということで、人材育成がいの一歩だと思っています。

佐藤委員

ありがとうございます。あと、八日市南の先生に一つ。実は昨年度、土井委員と一緒に、ふれあい教育対談で現地へ行って参りまして、本当に素晴らしい環境で、校内を案内してくださった3人の生徒さんが、

自分の言葉でしっかり生き生きと夢を持って、自分の将来像をしっかりもって語って下さったので、非常に想いが強いのだと思いました。とても魅力がある学校だと感じていて、茶髪の女の子が、子牛や鶏をすごく大事に育てていて、熱く語ってくれるんです。それが今風でいいなと思ったのと、こういう子たちが、命の大切さを実感していますということを、目をキラキラして語って下さったのが非常に印象的でした。

食の文化が世界遺産登録されましたけれど、オリンピックに向けて、世界の中で日本がどう存在するのかと考えた時に「食」というのはとても大事で、それを文化にしていくということも大事なことです。生産の部分であるとか、農業も畜産もそうですけれど、日本の中では非常に高いんですが、世界基準でみると基準が明確になっていないところがあるので、ぜひ、そういう所を御校で最先端を走っていただければと思います。

そうした時に、やっぱり一番感じたのが設備です。女性のお手洗いの入口に扉がないということを伺いました。生徒さんに聞くと、学校の施設、設備のきれい、汚いに関係なく、こういう学びが出来ること自体が楽しいのだとおっしゃっていましたが、これは校長先生に代わって、ぜひ予算というか、せめてお金を使えるようにしていただければと思います。そうして、世界の最先端に行くような学校であっていただけたら、滋賀県の魅力がまた一つ増えると思いますし、滋賀県の認知度も上がると思います。

青木教育長

また後ほどご意見をいただく時間もございますので、それでは、岐阜工業高等学校の取組について伺ってまいりたいと思います。本田先生、どうぞよろしくお願いします。

それでは改めてご紹介をさせていただきます。県立岐阜工業高等学校で進路指導主事を務めておられる本田悟志先生でございます。岐阜工業高等学校は、昨年度、創立 90 周年を迎えられました。非常に伝統と歴史のある学校で、岐阜県で工業教育の中核を担っておられる学校で、これまで約 3 万 6 千人の卒業生を輩出されまして、全国で活躍さ

れています。

本日は、本田先生から岐阜工業高校の取組について発表をいただき、その後、質疑や意見交換をさせていただきたいと思います。それでは、よろしくお願いします。

本田進路指導

主 事

このような機会を与えていただきまして、どうもありがとうございます。私たちは、他の県の専門高校の取組を知る機会がなかなかございませんので、本日は勉強させていただきたく参りました。どうか、よろしくお願いします。

それでは早速、本校のキャリア教育の取組と言うことで説明をさせていただきます。まず、先ほどご紹介をいただきましたが、本校は大正 15 年に 3 学科で開校いたしました。昨年度、90 周年の式典を無事に迎えることが出来まして、県内では一番古い工業高校です。現在は、機械科 2 クラス、電子機械科、設備システム科、建設工学科、化学技術科、電気科、電子科、デザイン工学科の 8 学科・9 クラス、1 学年 360 名定員で、現在 1,078 名が在籍しています。

所在地ですけれども、岐阜県の南西部、愛知県との県境の笠松町にございまして、地域の方には、「かさこう」の愛称で呼ばれています。

次に校訓です。「礼儀正しく、勤労を尊び、創意工夫に努めよ。」こういう校訓の下、毎朝、部活動の朝練習をやっておりますが、最後に校歌を歌い、校訓を発声しています。

本校では、3 つの柱で日本一を目指すという取組で、「ものづくり日本一、資格取得日本一、部活動日本一」で取り組んでおります。ものづくり日本一では、「若年者ものづくり競技大会」で全国学生部門で優勝・入賞して技能向上に取り組み、資格取得では、全国工業校長会のジュニアマイスターという制度の中で、300 点以上の高得点をあげ、全国で最優秀賞をとる生徒がいます。それから、部活動でも、昨年度と今年のインターハイで、ボクシングで全国優勝してくれ、日本一というものを身近に感じられるような生徒が居てくれて、それに目標をもってやっているところでございます。そういった生徒が 3 年間の取組をして、卒業していく時に、「この学校を卒業して良かった。」

と言ってくれるよう、満足度日本一を目指す取り組みを、生徒と職員が一緒になって取り組んでいるところでございます。

教育目標では、「社会や地域から期待される魅力ある工業教育の推進」ということで、4つの教育の方針の下で取組をしております。

進路状況でございます。過去5年間の就職、進学状況でございますけれど、ここ3年間は70%が就職、250名くらい、30%が進学、110名くらいといった進路となっております。過去の求人状況でございますけれど、彦根工業さんと同じように、昨年度6倍を超えるような求人をいただいております。岐阜県の求人活動も全国でトップクラスでありまして、そういう意味では企業さんからの要望が非常に強いと感じております。昨年度の県内での就職の状況でございます。県内57%と言う数字でございます。

進学の方では、110名くらいの生徒がおりますが、4大へ行く生徒が40%ということで年々少なくなっております。色々な経済状況の中で、専門学校への進学に切り替えているというのが現状でございます。これが本年度の進路状況でございます。

就職者の中の希望は、74%が県内を希望しておるという数字でございます。後ほど説明をさせていただきます。こちらのアンケートの方は、彦根工業さんでもやっておられました、卒業した生徒に11月にアンケートを取っており、その状況を聞き取りました。就職者についてですけれども、「現在の進路先に満足していますか？」という質問に対して、80%を超える生徒が満足をしているということです。彦根工業さんは90%を超えるということなので、少し少ないかなと思いながら数字を見ました。その内容ですけれど、やはり、楽しく仕事が出来ているとか、やりがいがあると、こういったような意見をもらっておりまして、そういう意味では、自分がやりたいことが出来ているというふうに分析をさせていただいております。

続いて進学者についてです。進学者についても、満足している生徒が97.5%と非常に高い結果をもらって、本人たちが満足していると捉えております。その主な理由として、「やりたいことがやれている。」とか、「目標が明確なのでそれに向かってがんばれる。」というよう

なことで、本人たちがしっかり目標をもって決めてくれたと思っております。就職と進学を合わせた数字では、85%近くの生徒が満足をしてくれていると思っております。

本校の進路指導における重点目標ということで、各学年でこういった目標を立てております。1年生では、勤労観、職業観の育成ということで、まず専門というものは、何であるかということをしかり理解して進路へつなげていく。それから2年生では、進路適性の認識と理解ということで、自分たちの専門性を理解した上で、自分自身を知って、専門の中でこういった職種に向いているのかといった事を理解できるように取り組む目標を置いております。3年生では、具体的に自分で情報を集め、自分で進路の決定が出来ることを目標に進めております。

続きまして、実際に本校に入ってくる生徒の学力は、若干低迷してきているのは現実であります。本校でも、基礎学力の定着向上を目指した取組ということで、朝学習を毎週火曜日・木曜日に実施しております。それから、外部模試を各学年2回ずつ実施して、その結果を全て分析をして職員研修を実施し、その職員研修を実施する中で共通理解を図りながら、日頃の授業に生かしていく取組を行っております。

それから就職支援についての取組です。1、3年生で6月に企業見学を実施しており、各科が企業訪問をさせていただいております。それから進路ガイダンスで、企業様に来ていただいて、実際にどんな人材が必要か、こういった事を学ばばいいのかを具体的に生徒にお話をさせていただいております。それから、保護者にも理解してもらうために企業見学や説明会を実施させていただいております。

岐阜県の教育委員会で行われておりますキャリア教育でございます。左側が全体計画、右側が年間計画です。学科毎に、各学年でこういった年間計画を立てまして、そして、全教科がこういった専門科に対して関わりが持てるのかといったところを計画にたててもらっています。キャリア教育を考える上で、職員の共通理解を図るといったところが非常に大きな問題であり、難しいところでございますけれど、こういった取組をする中で、それぞれの学科に対して、自分の教科が

どんなことに取り組めるのかを理解できることが効果的な取組と思って紹介させていただきました。

先ほど紹介させていただきましたが、県内就職者の割合では、東海で比較しますと、愛知県 97%、三重県 88%、静岡県 93%、そして、滋賀県が 92%と、9 割以上の生徒が県内で育って就職してくれていますが、岐阜県を見ますと 76%が県内、24%が県外ということで、4 分の 1 の生徒が県外に出て行ってしまいます。特に本校の場合ですと、成績優秀な生徒が、技能五輪を経験したいとか、資格を取得しさらに勉強がしたいと、愛知県にある企業さんが学園制度を設けられておりまして、そちらに行ってしまう、つまり優秀な人材が県外に出てしまうことが大きな問題で、県内の企業さんに十分応えられないのが今の一番大きな問題だと思っております。そして、これからの取組として、今年度、文科省の方から SPH、スーパープロフェッショナルハイスクールの指定を受けまして、これから 3 年間進めていきます。大きな目標として、地方創生を具現化するために特に成長分野における「航空宇宙産業」や「情報通信産業」の技術者の育成に力を入れていきたいと思っています。岐阜県から「ものづくり教育プラザ」という建物を本校の敷地内に建てていただきます。また、航空機関係の川崎重工などの企業から技術者を招いて、いろいろ教えていただいたり、一緒に研究開発をさせていただいたりします。また、情報通信産業、IoT として、ロボットアプリケーションプログラムの開発などに取り組んでいきます。さらに、地域連携として、特別支援学校と共同学習で一緒にものづくりをしながら、そういったことも踏まえて、少しでも地元の航空機産業に目を向けて就職していつてくれる生徒が増えてくれることを期待しながら取り組んでいきたいと考えております。大変簡単ではございますが、以上で発表を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

青木教育長

ありがとうございました。まずは今本田先生から発表していただきましたことについて、ご質問かご意見があればよろしくをお願いします。

宇野委員

専門高校の取組を分かりやすく説明していただきました。従来の学校教育の枠組みを超えた広範な取組に感銘を受けながらお話を聞いておりましたが、本田先生に質問がありまして、高校の進路担当の先生から時々伺う話として、知的な発達段階の生徒さんが専門高校には最近増えているかなと思うのですが、岐阜県ではどうなのでしょう。

本田

進路指導主事

実際のところ、いろいろな生徒が入学してまいります。人とコミュニケーションすることが苦手な生徒はおりますし、そういった子どもたちにも普段から実習という授業がございますので、体験活動を通じて友達とコミュニケーションを図るような授業展開をして、少しずつですがそういったところを改善しながら3年生になって社会に出られるような教育を続けております。

宇野委員

IQが高いお子さんの方が就職が難しいというお話をちらほら伺うことがあります。就職ということであると、離職をしないスキルというのは別なのかなと思う。普通科の高校であれば、大学入試があったりとか、エントランスを通過することを中心に教えますが、でも本当に大事なのは離職をしないスキルを身に付けることなのではないかと思うのですが、発達段階で知的に高い子どもさんは、離職をしないスキルは関係ないんじゃないかなと思っています。離職をしないためには、子どもたちにどういうことを教え、伝えるのか。先生のご意見を聴かせていただければと思います。

本田進路指導

主事

工業高校ですので、各専門科で勉強していくわけですが、中学校から高校に入ってくる段階で、だんだん興味を持ってきてくれます。その中で、どういった仕事につながっていくのかといったところをより多く知ってもらおうということが一番大事なかなと思います。そういったことを考えて、企業を見る、また、実際にインターンシップで体験をする。それから先輩に来ていただいて話を聞く。そういった取組から自分のイメージといったものを作っていきます。それから、これは皆さんやっておられるかもしれませんが、必ず企業を受ける前に

企業見学、事前見学というのをさせていただきます。そして、求人票では分からない部分を自分で雰囲気を感じて、それから受けてみようかということをも自分なりに考えてもらい、彦根工業高校もそうだと思いますが、このように離職率が非常に低い数字で推移しているのではないかと思います。先ほどもお話がありましたように、成績のいい子が必ず受かるかということ、実はそうではないというのが正直なところですよ。先ほど委員がおっしゃったように、企業様のニーズですとか、コミュニケーション能力ですとか、そういったところの感じられる部分はあります。成績がいいからいいというわけではありませんし、そういう部分を我々も感じつつ、そういうところを大事にしながら、子どもたちに少しでも多くの人に話をする機会を与えていくということが必要なのだと思います、取り組んでおります。

宇 野 委 員

離職をしないために彦根工業高校ではどういうことに気を付けておられますか。

大 菅 校 長

今本田先生がおっしゃったように、事前に生徒が企業を見学するとか、まさに自分で納得してくる。あるいは、今委員がおっしゃった発達障害についてはそれぞれの特徴がありますので、その課題が障害にならないような企業の中での仕事とのマッチングを、担当者がきちんとすり合わせをしながらやるようにしています。それでもやっぱり障害が大きい場合は、さらに「はたくら」の支援を受けたり、手帳を取ったりといったことを含めて、まさに個別支援をしております。また、学業成績と企業が求めているものは必ずしも一致しません。最近企業の方がおっしゃるのは、コミュニケーション能力などいろいろありますが、一番はへこたれない生徒、負けない生徒を求めておられます。

土 井 委 員

岐阜工業高校の取組について伺います。教育を考える際には、入り口と出口があって、その間にカリキュラムがあり、それを担当する教員がいる。この4つがポイントになると思います。そこで、伺いたいのですが、専門高校の場合、一番大きな問題になるのは出口で、

どういうところに卒業生を受け入れてもらうのが、教育に一番直結する問題だと思います。最近では産業構造の変動期で、技術の盛衰も激しく、工学部の学科においても入学者数の変動が顕著です。そこで、専門高校で学科を組んでいかれる上で、どの程度時代の流れに適応させておられるのでしょうか。専門高校の難しい点は、施設の整備など、普通科よりもお金がかかる。そういう点で、受け入れる側の企業の方々が学校側のカリキュラムにどれぐらい関与されているのか、現状を教えてください。もう一つは、入り口の問題で、生徒の皆さんは入学時に専門の学科を決められるのですよね。中学校を終わった段階で、どれぐらい自分の進む道をしっかりと考えて入ってきておられるのか。学校に入ってから、自分はやっぱりこっちがいいというのが結構あるのかどうか。その辺をお聞かせいただければと思います。

本田
進路指導主事

出口の部分ですが、正直に申し上げて、工業高校は非常にお金がかかります。一つの機械を買うのに何百万かかり、1セットでは授業になりませんので、最低10セットぐらいは必要になります。そうすると、一つの施設、例えば試験機というのがあるのですが、それに1千万、2千万という額になってしまうので、施設、設備を変えることはできません。そんな予算はありません。ただ、基本的な動きですとか考え方は変わっていませんので、そういったところを私たちは教えるしかありません。新しい技術があるんだよといったことは見据えつつ、県の方で、商工労働部の働きかけ、予算によって、企業の方が教えに来ていただき、支援をいただいています。そういう意味では、我々も歯がゆい気持ちはありますが、現状の中でできることをめいっぱいやるという気持ちが正直なところで、日夜取り組んでおります。

そして、入り口の部分ですが、これも非常に難しい問題でして、成績である程度割り振られてしまうところがありますので、少しでも興味のあるところへ入ってくれるというのが工業高校に来てくれているのかなと思う子と、そうでなくて、中にはぼくの点数ではここにしか入れないという子もいます。そうすると、入ったからどうなんだといったところを我々は大事にしていまして、少しでも関連する部分に興

味を持ってもらえる、面白さを知ってもらえるといったところを一生懸命に伝えます。機械のことをやってきたけれども、車のこの部分がおもしろいとか、航空機のこの部分が面白いなといったところに、少しでも興味を持ってもらえるような勉強を我々は伝えます。そして、3年生になった時に、多くの生徒は自分が勉強してきたことを生かせるような仕事に就きたいと言ってくれます。それでも、やっぱり中には夢を忘れられずに違う勉強がしたいということで、専門学校へ行って新しい分野に行くと言う子もいますので、そういった子達には背中を押して、がんばれと言います。専門性に対して興味を持ってくれた子に対しては、自分がどういう分野に興味があるのか。自分が将来どういう仕事をしながら生活するのかというところをイメージさせて、本当に行けるのかという話をしながら、自分はこんなイメージを持ってこの会社に行きたいと言ってくれるような指導をして、会社を受けてもらいます。岐阜県は独特なところがありまして、事前に企業を見学させていただくのですが、親御さんがついていく傾向があります。他県にはないと思うのですが、企業の方とお話するのですが、保護者もついていっていいですかといつも質問します。岐阜県の企業さんはぜひ親御さんも見てくださいとおっしゃっていただくことが多かったのが当たり前だと思っていたのですが、県外の企業さんと話した時に、他県では聞きませんと言われました。

三日月知事

彦根工業高校はいかがですか。

大菅校長

生徒だけです。

本田

進路指導主事

地域の特徴かなと思いますが、これも善し悪しだと思います。ある意味では、親御さんに理解してもらって、子どもたちは18才ですので進路について迷うこともあります。そんな時に保護者の方に話をしてもらえるような取組の一つであるのかなと思いますが、逆に、親御さんの方が必死になって質問して子どもが取り残されるなんてこともあるようです。

三日月知事 3年間の在学中に学科間を移動するということはあるのですか。

本田 基本的にはないです。1年生で専門の基礎をやって、2、3年生で
進路指導主事 応用につなげていくという形ですので、途中で変わるということは難しいです。

三日月知事 岐阜県の工業高校はいくつあるのですか。

本田 8つあります。

進路指導主事

三日月知事 8つもあって、さらにこれだけ学科があるのですか。

本田 岐阜工業が規模としては県内で一番大きいので学科数も一番多いの
進路指導主事 です。

藤田委員 岐阜工業高校では、本当に幅広い学科を網羅されていますし、さらに航空もあるのですが、これだけ学科が増えてくるということは、先生方の教える方もいろいろとご苦労があるのではないのでしょうか。そして、もう一つは学科をこれだけ増やしてこられたのは、産業界からの要望を受けてなのか、学校自身が必要だろうと感じて学科を増やしてこられたのか、どちらでしょうか。

本田 古いことは分からないのですが、元は10クラス、11クラスという
進路指導主事 体制で本校はきておりました。少子化等もありまして、学科改変で今の規模になりました。ただ、数年先に工業高校見直しということが言われておりまして、今の数の工業高校は残らないと思います。一番小さい学校で4クラスの学校がありますが、工業高校全てで定員が埋まっているかというのと、なかなかそうはいきません。今は統廃合された学校の工業科の分校という形で残っていくのかなと捉えております。

また、教員ですが、航空機産業というお話がありましたが、大きく

分けると機械科の中でコース制をとって、20人ぐらいの生徒を担って
いこうということになっています。職員も一緒になって勉強している
ような研修をしながら進めています。岐阜県には中日本航空専門学校
という航空機の専門学校があります。そこへ職員が短期留学というこ
とで3か月勉強しに行って、生徒も課題研究の時間に定期的にその学
校へ行って航空機の勉強をさせていただくという形で連携をとりなが
ら取り組んでいるのが現状でございます。

藤 田 委 員

東海4県と滋賀県の就職状況を見ると、どこの県も地元への就職と
いうのが総じて高いのですが、地方創生というのは工業高校にもっと
力を入れないといけないということなんだと思います。滋賀県にも大
学が11あるのですが、県内に就職するのは3割程度。7割が出て行っ
てしまうのです。そう考えると、高校は定着率が良くて、地域のため
に役に立っているのかなと思います。彦根工業高校の発表の中で出た
オープンファクトリーというのは非常に素晴らしい制度だと思います。
ものづくりの中で、工業は時代の進化とかスピードに対して機械
とか設備とかの入替えがお金もかかるし非常に難しい問題だと思いま
すが、このオープンファクトリーについては人材育成のプラットフォ
ームのように見えます。機械自体は学校のものを使って、材料は企業
に持ってきていただくという形なのではないでしょうか。

大 菅 校 長

小道具と材料を持ってきてもらいます。

藤 田 委 員

小道具と材料を持ってきてもらっても機械が古いと使い物にならな
いということはないですか。

大 菅 校 長

おっしゃる部分もありますが、新しい機械を入れていただいている
ところもありますので、そういうところは有効に活用させていただい
ております。去年から始めた取組ですが、それが生徒の技能向上や教
員の力を高めることにつながると考えています。ないものはしょうが
ないので、できる範囲の中で最大限活用するしかないと考えています。

藤 田 委 員

ものづくりは生徒の成長と意欲が成果として結びついているなと思います。

三 日 月 知 事

私は専門高校の教育を大事にしたいと思っています。岐阜工業高校、関連して彦根工業高校にもお伺いしたいのですが、まず高専との違いについて伺います。企業から、岐阜工業高校も一生懸命やっていただいて立派な生徒が多いですが、高専の方が、という話になった場合、3年と5年との違いの中でどういう生徒指導をされて、企業とどういう関係を構築されているのか。もしくは、これから統廃合という段階に入ってくる時に、3年の教育を5年に延ばして、より専門的な工業教育を志向されるのかどうなのか。そのあたりを教育の現場の実態やご意見を聴かせていただけたらと思います。

本 田

進路指導主事

高専と工業高校は全く別物という扱いを受けます。高専は短大卒と同じ扱いで企業も就職を考えますので、高校生の採用とは全く別です。高専の方は大学に近いので学生という扱いでやっておられます。一方、工業高校の生徒は18歳で社会に出るということを意識して、日頃から、こういうことをしないといけない、こう対応しないといけないということを、服装なども含めて、細かく指導していますが、高専の場合は、学生という大人の扱いですので割とフレンドリーにやっておられます。

また、これからの取組については、本県が多治見工業高校は窯業科があり、そこに専攻科というものがあります。高校を卒業した子がそちらで1年間勉強できるというシステムで、その専攻科のようなものを他の工業高校でも考えていかないといけないのではないかとということを検討していこうかという状況になっていると聞いています。

大 菅 校 長

私が思う工業高校のブランド化というものは、行き着くところとしては専攻科なのだと考えています。高校生の専門性を高めて、研究者でなくて技術者でなくて、技能者として高校では育てていきます。本

校の卒業生でも、旋盤を削るのに非常に技能が高い子がいた。この会社に行けば技能五輪に出られるからその会社に行ったという子がいました。ノーベル賞を獲得された方の会社で、大量生産ではなくて、研究のための機材を開発するための技能工として仕事をしている子もいます。技能を高める、知識をつけてやる。工業高校をブランド化するためにはそこが 필요한のかなと、私自身は思っています。そのために、別の見方でいうと、デュアル学習といったものがあります。民間企業で働きながら技能はこちらで勉強して知識は学校で身に付けると言うことを言うのですが、社会人にも適用できる。社会人は昼間仕事をしながら、特別な知識など、瀬田高校で専修科をやっています。今申し上げた3つを併合しながらやっていくといいのではないかと思います。

三日月知事

今のお二方のお話を伺っていると、多治見工業高校は3年間で卒業した後、もう1年できる。また、大菅先生がおっしゃった専攻科がブランド化につながるということでいうと、3年間の工業高校の教育に1年、2年プラスするというのも一つの方策ではないかということですか。

大菅校長

私自身はそう思っています。今日の中日新聞に愛知総合工科高校の記事が載っています。今年4月に第1回の入学者を受け入れた高校ですが、学科の改編などをされて、専攻科の募集をされて、それは公設民営化の学校です。そういうことも考えながらやっていくことは、工業高校のブランドをより高めることに近づくのではないかと思います。これは私の私見ですが。

藤田委員

知事がおっしゃることはよく分かります。産業界で議論すると、滋賀県にだけ高専がないという話はよく出てきます。

三日月知事

高専について、滋賀県には立派な工業高校があるからいいじゃないですかと言うのですが、福井にもあって京都の舞鶴にもあって奈良に

もあるのに、滋賀県にだけ高専がないということを言われます。

大 菅 校 長 詳しくデータを取ったわけではないですが、高専は入学者や卒業生で今苦勞をされているというのは聞いたことがあります。大学と高校の間に挟まれて就職などで苦勞をされていると聞いたことがあります。岐阜高専や鈴鹿高専などですね。

三 日 月 知 事 岐阜にも高専があるのですか。高専があつて、工業高校も 8 つあるのですか。すごい工業人材供給地域ですね。

大 菅 校 長 そういう地域でも、前は求人倍率が 10 倍ぐらいあつたのが、今は下がってきていると聞いたことがあります。

三 日 月 知 事 あと、最後に三上先生にお伺いしたいのですが、先ほど ICT の機器があつたらとおっしゃっていましたが、あつたら使いますか。どんなものがあつたらいいですか。

三 上 校 長 タブレットとかがあれば嬉しいですね。

三 日 月 知 事 タブレットは 1 台もないのですか。

青 木 教 育 長 授業用としては少しあつたかもしれません。

三 上 校 長 アクティブラーニングを進めていく際にタブレット機器があると、よりアクティブになります。うちの授業は実習はアクティブなんです、授業はアクティブではないんです。そこをアクティブ化したいというのが私の思いで、普通教科プラス農業科の座学をアクティブにして、生徒が話し合いながら協働しながらコミュニケーション能力を養えると思います。

先ほど離職率のお話がありましたが、離職するかどうかは質問がちゃんとできるかどうかだと聞いたことがあります。言葉は悪くても「お

っちゃんこれ教えて」と聞ける子は離職しない。つんとしていて質問できないと離職してしまうという話をどこかの企業で聞いたことがあります。アクティブラーニングの授業を進めることで、質問できる風土が根付けば、そこにも良い影響があるのではないかと思います。今の一斉授業では質問がしづらいですので、そこを変えるといいと思いますし、授業のアクティブ化の流れがありますので、そのあたりを何とかしたいと思っています。

青木教育長 そろそろ時間ですが、最後にこれだけはという方がいらっしゃいましたら、はい、どうぞ。

宇野委員 離職の件でお答えいただきありがとうございます。発達障害を診る時に、子どもに必要なスキルというのはいろいろあると思うのですが、結局、ルールを守ることと報告、連絡、相談ができること。これに尽きるのかなと私は思っています。相談してよかったといった経験があれば、相談する子に育つのだと思います。今の子育てを見ていると、割と親が押し付けてしまう。何でも親が決めてしまう。基本的に講義形式なんですね。子育ても学校も。そうすると、子どもとしては相談してもメリットがない。だから相談しなくなる。その点、先生がおっしゃった相談することが大事なことだというのは、私も実感としてありますので、意を強くした次第です。ありがとうございました。

青木教育長 ありがとうございます。まだまだご質問、ご意見はあろうかと思いますが、時間が参りましたので、知事、最後にいかがでしょうか。

三日月知事 皆様、貴重なお話をありがとうございました。今日伺ったことを今後の糧として、総合教育会議を教育委員会と一緒に頑張ってまいりたいと思います。今後もお力添えをお願いすると共に、皆様のご活躍をお祈り申し上げて、簡単ではございますが、お礼とさせていただきます。ありがとうございました。

青木教育長

本日は長時間にわたりありがとうございました。貴重なご意見や現場での体験を聴かせていただきました。課題もいただきましたが、そこは今後知事ともご相談していければと思います。次回の会議ですが、9月7日に予定しております。詳細につきましては追ってご連絡させていただきたいと思います。本日はお疲れ様でした。

(終了)